

妙高西条農園 おたより

No.150
6月号
2024.6.23



今月号でこの「おたより」も150号となります

今月号で150号を迎えるに当たり別紙の特集号を作成しましたのでそちらの方も一読してみてください。本紙では、通常の6月号としての情報を掲載して行きます。

毎年6月号を作成するに当たり日本の米作りはこれでもいいのか疑問を持っています？

新潟県は広いので全ての農村農家で私の周囲のような変化が現れているとは思っていませんが、私の圃場の周りでは数年前まで圃場の周辺では、5月の田植えが終わる半月もすると、カエルの大合奏が始まり「うるさくて」睡眠不足が心配されるくらいでしたが、今ではカエルの鳴き声など、まったく聞こえない田舎になってしまいました。

ここ数年の急激な変化に戸惑っています。果たしてこんな農村になっていいのでしょうか？

とで、稲の無効分ケツの抑制、圃場の土壌への酸素供給、収穫時の圃場地盤の耐力確保等色々な効果が期待されますが、カエルのオタマジャクシの生育期間には約1ヶ月ほどかかります。圃場の水を全て抜き取り、圃場面を乾燥されたのでは、水性動物類は生きてゆけません。

まずこの異変に気づいたのは7〜8年前からトノサマカエルが見られなくなったことです。つづいて2〜3年前からあれほどいた、アマガエルも見られなくなってきました。

私が、米作りを引き継いだ20.数年前の水田には、水性動物類としてトノサマカエル、アマガエル、ドジョウ、ゲンゴロウ、ホタルなど沢山いましたが、今ではタニシが少し見られるほどです。

イナゴやバッタ等昆虫類の減少は、農薬が原因だと思いますが、水性動物類は20年程前から始まった、徹底した圃場の中干しの性だと思われまます。

確かに中干しは、田植え後1ヶ月程過ぎた時期から、圃場の水を抜き圃場面を乾燥するこ



中干し前の江立で作業



中干しが始まりおずかに増えた水たまりに集まったオタマジャクシとアマガエル

全国の稲作り農家でも危機感

この春 HB-101 研究会でおじゃました兵庫県三木市で日本1の酒米「山田錦」を生産

されている谷郷肥料店オーナー様の山田錦栽培の説明の中で話された際に「以前はこの地域でも水路等の小川に川魚やドジョウが沢山いて楽しかった。今では何もいなくなり田植えも6月に行われていましたが、今では5月中に全て行われ、自然を感じなくなりまして」と話されており、全国の農家でも私と同じ思いでおられる方が居ることに感動しました。

「カエルの歌が聞こえてくるよ・・・」「ホ、ホタル来い、こちの水はおいしよ・・・」この歌は昔のことになってしまったのでしょうか・・・？



研究会参加者に説明中の谷郷オーナー

6月の農作業の動画が下のQRコードから見られます



プチヒゲカメムシ？

ニンニクの収穫時に畑脇の草むらで見つけたカメムシです。背中のカップの模様が面白いですが、農作物にも被害を与えるとのことです。



収穫されたニンニク

他の農作業も有、遅れていましたニンニクの収穫作業もやっと終了しました。後は乾燥し順次黒ニンニクの製造加工にとりかかります。皆様にお届け出来るのは7月上旬からかな？・・・

発行者
〒944-0023 新潟県妙高市西条755
妙高西条農園池田博子
TEL 0255-72-3497
Fax 0255-72-2908